



各国で協定校を増やし 学生に留学の場を提供

カトリック男子修道会の一つ、イエズス会を母体として、1913年に設立された上智大学。

2013年には創立100周年を迎え、百年の歴史と、これからの百年に向けて、新たなスタートを切った。

具体的には「優位性・独自性（上智らしさ）の樹立」「国際的評価を得る高等教育機関としての存立」「キャンパス・ライフの環境条件の整備充実」を選定基準に、「世界に並び立つ大学」としての存在価値の確立に向けた事業を進めてきた。

現在、神学部、文学部、総合人間科学部、法学部、経済学部、外国語学部、総合グローバル学部、国際教養学部、理工学部の合計9学部、合計1万3000人の学生数を誇る。

設立当初からグローバル化を目指した教育にも力を入れてきた大学でもあり、近年、国を挙げて進めているグローバル教育でも、「スーパーグローバル大学創成支援事業」「グローバル30」にも選ばれている。

2012年から理工学部で英語による学位取得プログラム「グリーンサイエンスコース」、グリーンエンジニアリングコースなど、英語だけで卒業できる「理工学部英語コース」を開設したほか、外国人留学生の受け入れも促進。2014年度は1797名の留学生を受け入れている。また、交換留学協定校／学術交流協定校も拡大。欧米だけでなく、アジアやアフリカの学校との連携も強化し、233校まで定校を増やしている。

日本人学生の海外留学も後押しし、長期・短期をあわせると10000人の学生が留学を経験。また、英語で実施する授業を増やすなど、国内で学ぶ学生の学力向上にも力を入れる。

高い語学力を身に付けられる語学教育が有名だが、「四谷キャンパス」に全学部が集結していることで、学部の枠を超え、海外からの留学生も含めた課外活動などを通じ、多様な経験、交流ができるのも強み」と早下学長。

「都心にある大学」も強みの一つとして、少子化の時代でも受験者数を増やしている。

（北川記）

イエズス会を設立母体に持ち、グローバル化で日本の大学教育をリード――

「真のグローバル人材の育成には、多彩な交流と多様な経験が必要。 欧米だけでなく、アジアやアフリカなど、多様な社会に触れる教育を」

「Men and Women for Others, with Others」他者のために、他者とともに――。この教育精神のもと、語学を始め、グローバル人材の育成で定評のある上智大学。14年4月、学長に就任した早下氏は、女性の活躍推進にも尽力。女性教員の比率を高め、女性が活躍しやすい環境整備にも力を入れる。

社会貢献活動に 力を入れる卒業生たち

―― 上智大学はイエズス会が設立母体ですが、そうした特徴も含めた上智の教育理念について聞かせて下さい。

早下 は、こ。「Men and Women for Others, with Others」他者のために、他者とともに生きる」、これが上智大学の一番大切な教育精神で、イエズス会の教育方針でもあります。

また、イエズス会の教育方針は厳しい面もあり、規定に達しない場合は単位を与えません。こうした厳しさがあるからこそ、良い学校になっているともいえます。

一方、教育には厳しくとも、心を非常に大事にする大学でもあります。

教育方針が明確なので、グローバル人材教育についても明確な方針があります。語学の上達だけでなく、相手のことをきちんと考えられる人材にならな

ければ、人間として成功しないという考えです。

こうした教育方針があるからか、上智の卒業生はNGOやボランティアの仕事に就く人も多いです。

―― 卒業生は、どんな思いで、NPOやボランティアをしているのでしょうか。

早下 講演会をしたときに社会で活躍する卒業生たちと話をしたのですが、彼らは自分のために生きていないんですね。苦しくて困っている人たちのた

めに、お金を集めてボランティアをやっている。そういう生き方をしていて人間は強いですが、そうした活動が巡り巡って自分自身に返ってくるのだと思います。

―― 世のため、人のため、という生き方を実践している。

早下 ええ。これはすごく大事なことだと思います。言うは易し、行は難（かた）しいと思います。上智大学の卒業生は、それを実践している人が多いと感じます。

上智大学学長

早下 隆士

Hayashita Takashi

シリーズ 産業界に人材を供給する大学は今…
〈第19回・上智大学〉



はやした・たかし

1958年3月宮崎県出身。80年九州大学工学部卒業、82年同大学院工学研究科修士課程終了、85年同研究科博士課程終了、工学博士(九州大学)。神奈川大学工学部助手、米国テキサス工科大学博士研究員、佐賀大学理工学部助教授、東北大学大学院理学研究科助教授を経て、2005年上智大学理工学部教授。09年理工学研究科化学専攻主任、10年理工学部長・理工学研究科委員長、14年4月学長に就任。

—— 先程、グローバル教育の方針も明確とのことでしたが、具体的にはどんな教育を実践しているのですか？

早下 これからのグローバル教育というのは、全世界を見なくてはなりません。アメリカやヨーロッパに行くことだけではなく、いろんな地域へ行き、そこで心と心の交流ができる、そういう人材を育てることが必要です。

実は、この教育のルーツも、イエズス会の教えにあります。上智大学は、イエズス会の教えのもとにある大学なので、その意味では、上智大学は設立の時点からグローバル化を目指した大学といえます。

英語で卒業できる 学部コースを創設

—— 上智大学は2013年に百周年を迎えました。スーパーグローバル大学にも指定されていますね。

早下 はい。また、上智大学は2009年、「グローバル30

(サートイ)」にも採択されました。これは日本のトップ13の大学が入っていますが、旧帝大を含めた7国立大学と、私立の6大学が選ばれており、上智は私大6校の一つに入りました。

わたしは、その頃、理工学部長だったのですが、理工学部の中に、英語だけで卒業できる学部コースを作りました。

大学院の英語コースは、比較的作りやすいのですが、学部の124単位をすべて英語で卒業させるプログラムは、非常にハードルの高い部分がありました。

ただ、わたしが上智にきた05年頃から、英語で講義ができる理工学部の先生を採用し始めていたので、いろいろ苦労はしましたが、12年9月の秋入学から、英語コースの「グリーンサイエンスコース」と「グリーンエンジニアリングコース」を作りました。

当初、これほど反響があるとは思っていなかったのですが、大変な反響がありました。



「日本で理工系の勉強をしたい」という世界中の学生を受け入れられるよう開設した、全授業を英語で行い、英語だけで卒業できる「理工学部英語コース」の授業風景

ただ、海外の学生が1年間交換留学をしたいと思っても、教養系の英語コースはあるものの、日本の大学の理工系で英語だけで教育をしているところは殆どなかった。

—— 日本に留学して理工系の勉強をしたいと思っても、言葉の壁があった。それを乗り越えるコースを上智が率先して作ったわけですね。また上智には設立当初から、そうしたグローバルの視点があった。

今は欧米だけでなく、世界中がグローバル教育に目覚めている時代です。

例えば、中南米やアフリカも含めて、これから国が発展するためには教育が大事ですし、アメリカやヨーロッパだけでなく、アジアにも学生を送りたいというニーズがあります。

そうした中で、アジアの技術立国といえば日本にスポットが当たります。

早下 そうですね。グローバルと言いますが、世界をつなぐ大学なることを目指してきました。それは、なぜかというところ、カトリック大学は世界中にネットワークがあり、古くから世界各地のカトリック大学との連携があったからです。

早下 230校を超えています。これらの大学とはほぼ万遍なく相互の学生交換が行われ

ピタウ神父には、仙台の講演会で初めてお会いしました。その時、名刺を持ってご挨拶に行ったところ、引き込まれるようなオーラを感じ、人間、この領域まで到達できるのだと大変感動しました。

ていることは、本学の大きな特徴となっております。

ですので、欧米だけでなく、アジアやアフリカにも連携している大学があります。

それから今は、特にアフリカに力を入れています。アフリカには54カ国ありますがカメルーンやコートジボワールなど、治安が安定している国に学生を派遣して、現地の人たちと交流するような教育プログラムも始めています。

早下 今は1000名程で、海外に留学している学生はどれくらいですか？

早下 こちらは約1700名です。現在、大学院生も含めた大学全体の学生数は1万3000人ですが、海外からの留学生は2割程度にしたいと思っています。2023年までに約3000人にまで増やしたいと。そして、一度でも海外留学経験のある学生を、最終的には全学生の7割程度までもっていきたいと考えています。

ドイツ語学科は原則として全員がドイツで半年間、勉強できることになっていますが、外国語の修得を必須とする学科については、そうした制度を在外履修としてどんどん広げていく考えです。

早下 はい。海外経験も含めて、グローバルな大学ということは上智の強さでもありますね。

早下 それは、海外から上智の強み、魅力を挙げるとすると、四谷のキャンパスにすべてが揃っていることです。一つのキャンパスにすべてが揃っていると、グローバル人材教育にしても、課外活動にしても、学ぶことが多いといえます。

異文化を理解するには、いろんな人たちと交流する経験がないと、その力は付いてきません。

例えば、経済学部だったら経済学部だけ、理工学部だったら

シリーズ 産業界に人材を供給する大学は今…

〈第19回・上智大学〉

理工学部だけというのではなく、経済学部の学生も、理工学部の学生も、国際教養学部の学生も、留学生も一緒にになって、サークル活動や課外活動などに取り組むことで、いろいろな意味でのコミュニケーション力を鍛えることができます。

マンモス大学になると、学部によってキャンパスも違ってきますが、上智大学は一つのキャンパスで多様性を育てられるのが特徴です。

女性が活躍する大学に

—— 上智は女子学生が多いことも特徴ですね。

早下 そうですね。そうした観点からも、わたしは理工学部長の頃から、女性が活躍できる環境づくりに努めてきました。

理工系の女性研究者は少なく、日本全国でも5〜6%程度です。上智大学も、わたしが理工学部長になった時は女性教員が5%を切っていました。

それで、いろいろな方策を立てて、女性教員の数を増やそう

としてきました。
—— 具体的にどんな取り組みをしたのですか？

早下 女性研究者の方は、パートナーも研究者である可能性が高いので、まず工学系の先生に学会で優秀な女性教員を探してもらい、ご主人が関東で教員をされていて、ご本人が関西で働かれていたとすると「上智で働いてみませんか」とお声を掛けることなどをしていきました。

こうして、わたしが理工学部長を終えた2014年には、当初5%を切っていた女性教員の比率が12%を超えました。

—— 女性教員が増えて、何か変化がありましたか？

早下 まず、学部が明るくなりました(笑)。それから、上智は女子学生に人気がある大学というイメージがあると思いますが、理工系もそれに合わせて女子学生が増えて、今では理工系の女子学生の比率が25%になっています。

女子学生が増えると、先輩と

カトリック教会の大司教に叙階され、教皇庁教育省次官にも就任され、本学学長を務められたヨセフ・パツと手を取られて「早下さん、どうか上智をよろしく願います」と数回おっしゃられました。

なる女性も増えるので「わたしも博士課程まで行ってみよう」ということも増えてきます。ですので、大学の戦略としても「理系女子(りけいじょ)」を増やそうとしています。

—— 産業界だけでなく、学界でも、女性の活用が重要な時代ですね。

早下 はい。日本は先進国、特にアジアの中で、女性の登用が最下位の国です。これは儒教の教えもあると思うので、意識改革も必要です。

例えば、男性は土曜も日曜も会議に出ているのに、なぜ出られないのか、ということになってしまっていることがあります。

そこで、わたしは学長になったとき、理工学部長と連携して新しい取り組みを始めました。

それは、男性教員に子どもが生まれたら2週間育児に専念させる「育児在宅研究制度」です。

意識を変えるには、まず男性の意識を変える必要があるからです。たとえ2週間でも育児に専念する経験を持てば、彼らが

将来役職者になったとき、女性に対しての理解が進むと考えたからです。

2週間の海外出張はありますから、それと同じように補講講義をすれば、他の先生たちに負担をかけることもありませんし、特別な予算をつける必要もありません。

この制度は、理工学部の教授会で内規として決めることができましたので、全学への取り組みへとさらに発展させていきたいと思います。

日本は人口減少で、有能な人材も比例して減っていきます。この問題への対処法は、海外から人材を連れてくるか、日本の女性にもっと活躍してもらう。この二つしかありません。日本には優秀な女性がたくさんいますから、もっと女性が活躍できる仕組みづくりが必要です。

以前は学部長として取り組んできましたが、今は学長として、女性が活躍できる制度を上智から発信していきたいと思っています。